

## 江藤新平と西郷

先月号の本欄では福澤諭吉の殉死論について記した。福澤が『学問のすすめ』の「七編」で殉死論を書いたのは明治七年の三月のことである。その直前の二月に「佐賀の乱」が起こって世情騒然たる時期であった。征韓論争に敗れ、西郷ともども下野して佐賀に帰っていた江藤新平を首謀者に仰ぎ、新政府軍に挑んで無惨にも鎮圧された不平士族の叛乱が佐賀の乱である。

江藤新平といえ、佐賀藩の下級武士の家に生まれ、維新後は文部大輔（文部大臣）、ついには司法卿（法務大臣）にまでなった明治政府の要人中の要人である。この人物の下野が不平士族の一团を凝集させる一大要因となったことは容易に想像される。江藤は同時に下野していた薩摩の西郷隆盛に拳兵を打診するものの、西郷はまだその時にあらずと応じず、結局は佐賀士族のみで強大化した新政府軍に挑み、敗北を喫した。

戦場を逃れた江藤は、ようようにして薩摩にたどりつき、指宿の鰻温泉に逗留していた西郷と会談、

渡辺利夫（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月、退任）。二〇一七年六月より現職。

薩摩拳兵すべしと鬼気迫る要求を西郷につきつけた。しかし西郷はこれにも頑として応じない。この時の様子をうかがわせる資料があるはずもないが、池波正太郎の『西郷隆盛』（角川文庫）によれば、鰻温泉の宿屋の女将のいうのには、西郷がはやる江藤に向かって、「そりや、当てが違げもすぞ」と叫ぶ声を確かに聞いたと記述してある。

江藤はその後、四国で拘束され、かけつけた内務卿の大久保利通により臨時裁判所が設けられ、半日もたたないうちに判決が下されて、「梟首」の刑に処せられた。梟首の刑とは、斬首した罪人の首を台にのせ、二日二晩みせしめのために晒し者にするという、いわゆる公開処刑である。

福澤諭吉は、西郷の心情を知り深く心を痛めて、不平士族の力による叛乱に自制を求め、辛苦の人生を耐え抜けば、叛乱などではなく一身を賭して正義を説きつづけよ、このマルチルドム（殉死）より他に世をただすまっとうな道はないのだ、と西郷にかわって説きたかったのであろう。